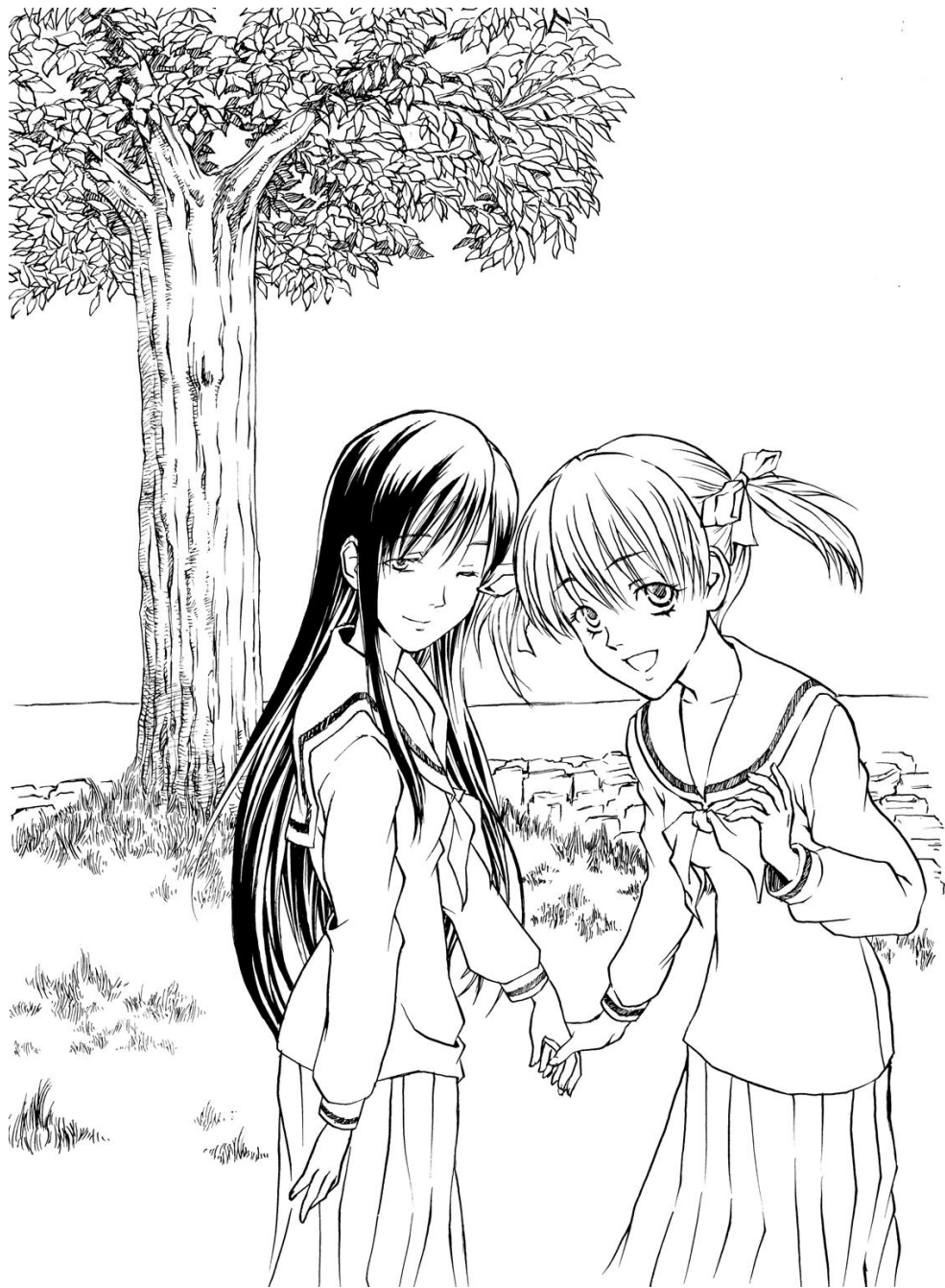


# マリア様が望む永遠



PARALLEL ACT



## はじまり

「ごきげんよう」

「ごきげんよう」

さわやかな朝の挨拶が、澄みきつた青空にこだまする。マリア様のお庭に集う乙女たちが、今日も天使のような無垢な笑顔で、背の高い門をくぐり抜けていく。

汚れを知らない心身を包むのは、深い色の制服。

スカートのプリーツは乱さないように、白いセーラーカラーは翻らせないように、ゆっくり歩くのがここでのたしなみ。もちろん、遅刻ギリギリで走り去るなどといった、はしたない生徒など存在してはいようはずもない。

私立リリアン女学園。

明治三十四年創立のこの学校は、もとは華族の令嬢のためにつくられたという、伝統あるカトリック系お嬢さま学校である。

東京都下。武蔵野の面影を未だに残している緑の多い

この地区で、神に見守られ、幼稚舎から大学までの一貫教育が受けられる乙女の園。

時代は移り変わり、元号が明治から三回も改まった平成の今日でさえ、十八年通い続ければ温室育ちの純粹培養お嬢さまが箱入りで出荷される、という仕組みが未だに残っている貴重な学園である。

夏休みも終わって新学期。何かが起こりそうな予感。今日も山百合会は忙しい。もうすぐ花寺学院の学園祭。それが終わったら、リリアン女学園の体育祭も待っている。そんな時、山百合会にもお休みができた。当然行くのは遊園地。祥子さまと二人だけのデート。きっと楽しいものになる。一生忘れられないものになる。

イラストノロンゲ魔神K

# マリア様が望む永遠

## もくじ

はじめり .....	i
第1章 プロローグ .....	1
第2章 再会 .....	10
あとがき .....	15



# 第1章 プロローグ

1・1

「あら、あなたたちもなの?」

「すみません、いつも通り、夜に行われるものとはかり……」

「あなたが謝ることじゃないわ。気にしないでよいのよ」  
時は九月。花寺学院の学園祭も、リリアン女学園の学園祭も近くなり、山百合会幹部は日曜日も必ず登校する。しかし、次の日曜日、志摩子さんは実家の小寓寺を手伝わなくてはならず、登校できない。それに加え、支倉・島津両家の会食が昼から行われることになっていて、黄薔薇姉妹も登校できないと分かったのだった。

「困ったわ。じゃあ、次の日曜日に登校できるのは私たちだけね」

そう言っつて、祥子さまは祐巳を見る。正確には乃梨子ちゃんも登校できるのだけど、ロサ・キガンティア白薔薇さまである志摩子

さんが登校しないので、何となく来づらいかもしれない。

「私なら、その日は大丈夫ですけど」

「それでもなかった。乃梨子ちゃんは、仕事を真面目にこなすタイプ。」

「いえ、せっかくだからお休みにしましょう。ずっと登校しっぱなしだと祐巳も疲れるでしょう?」

「そうですね。たまにはゆつくりと休みましょう……。あ、ずつとくすぶつていた、あることを思い出す。」

「どうしたの? 祐巳」

「遊園地に行きませんか?」

「遊園地? それなら夏休みになる前に断ったでしょう? 混んでて暑いのは苦手だって」

祥子お姉さまの眉間にしわが寄る。

「九月になったので、夏休みほど混んでないし、大分涼しくなりましたよ」

「それでも、混んでのや暑いにはかわりないわ」

「少しくらい混んでた方が遊園地は楽しいんですよ」

「せっかくの休みなのに、わざわざ疲れに行つてどうするの?」

「祥子さまとだったら、疲れなんて吹っ飛びます」

祐巳は祥子さまに食い付いて離れない。冬まで待ったら、以前約束した通り遊園地に一緒に行つてくれるんだ

るうけど、やっぱりそれまで待てない。

「お姉さま、私と遊園地行きたくないんですか?」

「そんなこと言っていないわ。時期をずらすって言うだけよ」

「お姉さまは、遊園地に行かれたことはないんですね?」

「そうよ、いけない?」

「冬まで待つてたら、お姉さまは他の方と遊園地に行かれることがあるかも知れないですよね?」

「そんなことはないわ」

「私、お姉さまと初めて遊園地に行く人になりたかったのに……」

ちよつと拗ねてみる。少し上目使い。それよりも、初めての人が祐巳と言つ言葉に、祥子さまも惹かれたらしい。

「分かったわ……。今度の日曜日、遊園地に行きましよう。全く、祐巳の我がままにも困つたものね」

祥子さまに我がままと言われたらお終いだ。でも、喜んでお礼を言った後、由乃さんが耳打ちしてくる。

「祐巳さん、祥子さまの操縦、上手くなつたわね。今度は了承させた」

「えへ♡」

誰かが言ったような科白を聞いて、祥子さまに見えな

いように、「っっそりと舌を出す。

## 1・2

「聞きましたわ、祐巳さま」

「聞いたって何を?」

「とほけないでください。祥子お姉さまとのデートのことです」

「ああ、そのこと」

暫くした土曜日の放課後、どこから嗅ぎ付けたのか、瞳子ちゃんが祐巳に食つてかかってきた。

「この忙しい時期にデートですか?」

「明日は、令さまや志摩子さんも来れなくて、仕事にならないのよ」

「だったら、休んで鋭気を養つておけば良いじゃないですか?」

「だからデートで養うんじゃない」

「祐巳さまはドラキュラですか?」

「ドラキュラ?」

これは初めての例えだ。怪獣の子供とは言われたことがあつても、妖怪のたぐいに例えられたことはない。でも、怪獣の子供と妖怪と、どっちがましだろっか?



「祥子お姉さまの精気を奪って元気になるうたなんて…」

「私、お姉さまを噛んだりしないわよ」

「当たり前です！ 例えなんですから」

瞳子ちゃんは、大きく腕を振り下ろして否定する。

「しかも、聞けば、遊園地だと言うではありませんか」

「うん、前から約束してたの」

「遊園地だと、余計に疲れるんじゃないやありません？」

「ううん、お姉さまと一緒にだと疲れない」

それに、祥子さまはジェットコースターのような、高い場所や激しい乗り物はお嫌いだから、落ち着いた乗り物だとかに乗れば、そんなに疲れないかも？

「祐巳さまでなくて、祥子お姉さまのことを言ってるんです。それに、祥子お姉さまが人混みがお嫌いなのは知っていますでしょう？」

「でも、遊園地は少し混んでないと楽しくないよ」

「それはそうですね、祥子お姉さまのことを少しはお考えらしたらいかがですか？」

それはその通り。デートコースと言っても、混まない所や、涼しい所は幾らでもある。でも、今は遊園地以外考えられなかった。

「私なら、祥子お姉さまが満足されるようなデートコー

スを選びますわ」

「えっと、それは瞳子ちゃんが祥子さまとデートしたいってこと？」

「!? そう言うことを言ってるんじゃないやありません!!」

顔をブンブンと振って否定する。それにつられて、髪の毛が激しく揺れる。

「じゃあ、瞳子ちゃんは、祥子さまとデートしたくないんだ？」

「そんなの、したいに決まってるじゃないですか!」

「ほら、やっぱり」

「ううん」

瞳子ちゃんが、顔をひしゃげて悔しがらる。なんとなく、言いたいことがあるけど、言えないで我慢しているようにも見える。

「もういいです!! 祐巳さまは、祥子お姉さまとお二人で遊園地を楽しんでみてくださいー!」

「うん、そうする♡」

にこやかに微笑む。瞳子ちゃんの怒りがさらに増した。

「!! まったく、人の気も知らないで! 祐巳さまなんて大嫌いです!!」

「あ、ちょっと……」

瞳子ちゃんは、頭に湯気を立ち上らせながら、振り向

きもせず去って行く。

「ちよつと、言い過ぎたかな？」

流石にここまで怒らせてしまつたと反省してしまふ。今度会つたら、謝らうと決めた。

「まったく、鈍感なんですから……」

祐巳から離れて、大分経つた後、瞳子は小さく呟いた。

### 1・3

街中を、長い長髪をなびかせて、颯爽と歩いている女性がいる。ピシヤリと伸びた背筋が凛々しい。スラリとした細い足に、ジーパンが似合っている。

「ごきげんよう。祥子お姉さま」

「あら、瞳子ちゃん。ごきげんよう。奇遇ね、こんな所で」

「ええ、偶然通りかかったので」

祐巳との待ち合わせ場所に向かっている祥子の前に、縦ロールの少女が現れた。「偶然」そんなこともあるのだからか？ こんな、普段歩かない場所です。

「せつかくですの、お茶でも飲みましょ？」

「ごめんなさい、この後待ち合わせがあるの」

瞳子ちゃんの顔が一瞬曇る。しかし、直ぐに明るく振る舞う。

「なら、そこまでお付き合います」

と言って、隣に並んで歩きだした。誰と待ち合わせをしているのかは、二人とも口に出さなかった。

暫くすると、道ばたで指輪などのアクセサリーを売っているのが目に入る。

「祥子お姉さま、ちよつと覗いて行きましょ？」

「そうね、少しだけならよいわよ」

普段、宝石店で見かける指輪と違い、宝石など付いていないシンプルな物が多い。もつとも、こんな所で宝石を売っていたら盗難が相次ぐだろう。また、ここでは指輪だけでなく、ペンダントなども売っている。瞳子ちゃんも、指輪は宝石店の物を普段見ている筈だが、露天のアクセサリーを食い入るように見つめている。逆に普段見慣れていない分、新鮮なのだろうか？

「祥子お姉さま、これ、欲しいなあ……。瞳子にプレゼントとして頂けません？」

瞳子ちゃんの指の示す先に、キラリと光る指輪がある。もつと良い指輪を持っているのに、どうして露天の指輪を欲しがるのだろうか？

「あら、このような指輪が欲しいの？ それに、ここで

買わなくても、いつもの店で買えば良いでしょう?」

「いえ、瞳子、この指輪が欲しいんです。それに、指輪は自分で買うよりも、プレゼントされる方が嬉しいじゃないですか」

いつもの我がままとは何か違う。目がうるうるとしていず、とても真剣だ。

「分かったわ。もう、しょうがない娘ね」

「ありがとうございます。祥子お姉さま!」

こうして、無理を言って買ってもらった指輪を、瞳子ちゃんは早速左手の薬指にはめた。嬉しそうで、それについて悲しそうな複雑な表情をして、指輪を眺めていた。

瞳子ちゃんが左手を眺めているのにつられて、祥子も自分の左手を見る。意外と時間が経っていて、待ち合わせの時間に遅れてしまいそうだ。

「ごめんなさい、瞳子ちゃん。もう時間がないわ」

「そうですか、それでは仕方ありませんね。どうぞ先に行かれてください」

「ごめんなさいね、また明日。ごきげんよう」

「ごきげんよう、祥子お姉さま……」

「どうぞ、楽しんでらしてください……」

小走りに去って行く祥子を、軽く手を振って見送る瞳

子。悲し気な顔でもう一度指輪を見ると、振り返った。

「ねえ、おじさま、この指輪」

1・4

(まったく、瞳子ちゃんにつきあっていたら、遅れてしまっただわ)

祥子は、祐巳との待ち合わせ場所に急ぐ。余裕を持って家を出てきた筈なのに、瞳子ちゃんにかまけてたらすっかり時間を消費してしまった。

(あの娘、どうしてあんなに駄々をこねたのかしら?)  
普段から我がままな娘ではあるが、「物を買って」とせがまれたことはない。お互い、買い物に困ったことはないからだ。

少し気になりつつ急いでいると、隣の道路を、救急車がサイレンを鳴らしてすれ違う。

「嫌だわ」

救急車が走ると言うことは、急病か、事故が起こったと言うこと。見ず知らずの人とはいえ、気分が良いものではない。それに、この救急車は何かが違っていた。それが何なのかは分からないが。

待ち合わせ場所に近づくと、そこに人だかりができて

いることに気付く。

「何かしら？」

その人だかりに近づくとつれ、段々と気分が悪くなってくる。

「酔っぱらい運転だったらしいぞ」

「女の子ですって……」

（女の子……？）

祥子の心拍が、段々と早くなる。悪い予感がする。人混みを掻き分けて、前に進む。

「デートの待ち合わせだったのかしら？」

「可哀想に……」

「まだ高校生だろ？」

人にぶつかりながら、押し退けながら前に進む。なりふりかまっていられない。

「すみません、通して、通してください……」

息を呑む。目の前に広がる惨状。辺り一面にガラスが散乱している。酔っぱらい運転でブレーキを踏まなかったのか、ブレーキ痕は無い。ワゴン車の前面左側が電話ボックスにぶつかり、電話ボックスは完全にひしゃげている。ぶつかった勢いで回転したのか、歩道のガードレールも潰して、車体が歩道に乗り掛かっている。運転席のドアは開いていて、中に人はいない。おそらく、既

に運ばれたのだろう。

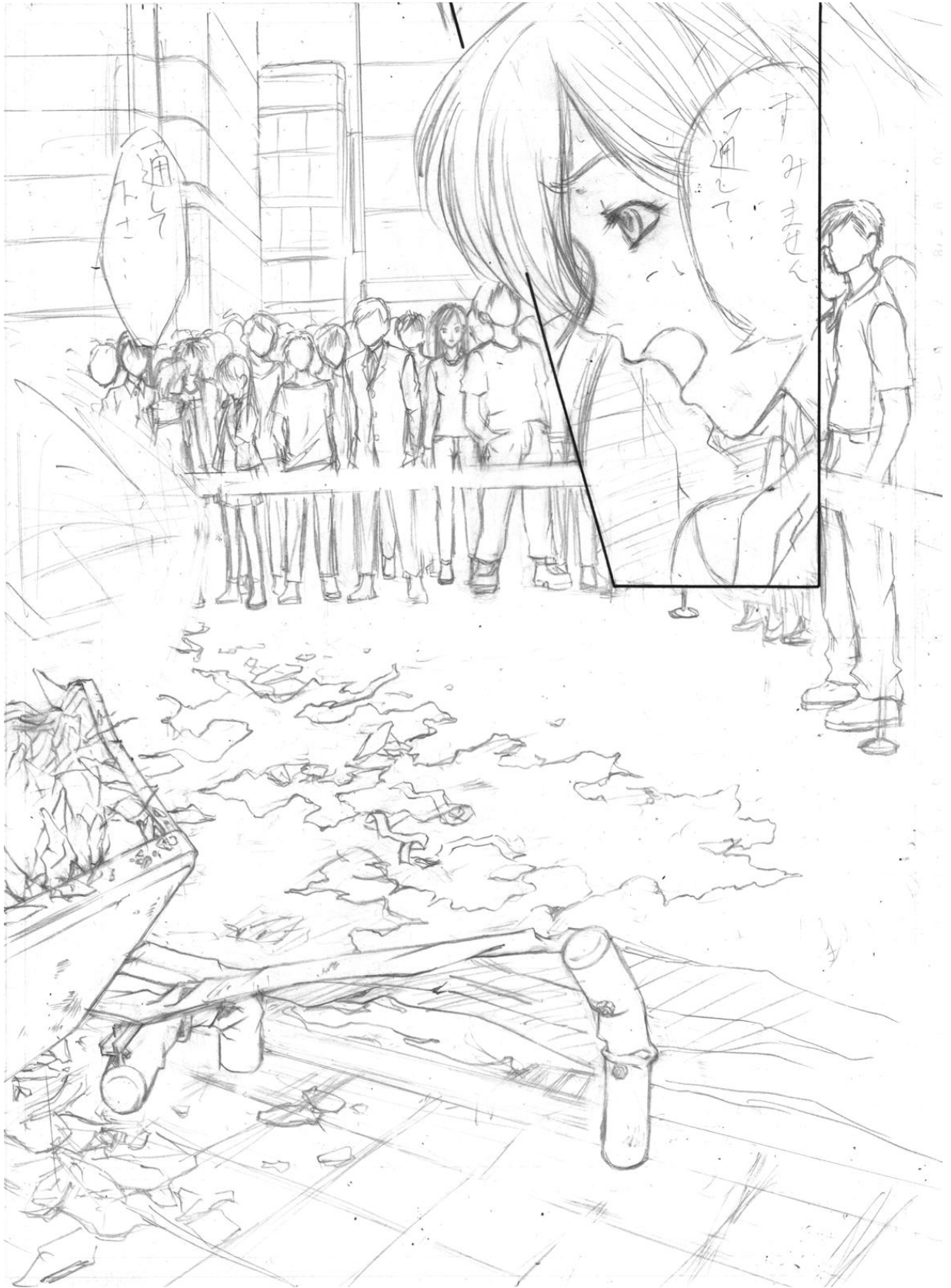
ゆっくりと視線を下に降ろすと、血の海が広がっている。運転席には血痕は無いことから、被害者の血液だと思われる。その海の中、祥子はある物が目に止った。

『リボン』

血の海の中、紅色のリボンが落ちている。いや、紅色ではない。紅色に染まったリボンが落ちている。その元の色、形、祥子には見覚えがあった。

祥子は、その場から動かなかった。じっと、リボンの元の色が失われ、完全に紅色に染まるのを見つめていた。いや、「見つめていた」と言う表現も適切でないのかも知れない。祥子の頭は空白になり、ただ「目に映っていた」状態だったのだから。

そう、そのリボンは祐巳のリボン。祥子の最も大事な妹のリボンだった。



病院の廊下、急ぐ足音。流石に走るわけにはいかない  
ので、小走りの音がする。

「祥子さま!!」

由乃が声をかけるが反応がない。祥子は、紅色のリボ  
ンを固く握りしめたまま、宙を向いている。

「あなた達も来たの?」

祐巳、そして由乃の担任が、由乃と令に声をかける。  
事故の連絡を受けた直後、祐麒は由乃と志摩子、そして  
担任に電話をかけていた。由乃はその時、島津・支倉両  
家の会食、志摩子も小寓寺の手伝いで留守。唯一担任だ  
けに連絡がついたので、既に駆けつけていたのだ。

「祐麒さんから、留守電が入っていて。それで、祐巳さ  
んは!?!」

「まだ手術中なの……。どうなのかは、全然分からない  
わ」

「そうですか……」

留守電が入っていた時間は十一時二十五分。もう六時  
間になるうというのに、まだ手術は続いている。

「祥子! 祥子!! しっかりして!!」

令が祥子を揺さぶる。事故現場で気を失った祥子は、

祐巳と同じ病院に搬送されて来ていた。気を失っただけ  
なので、身体には特に異常はないのだが、心ここにあら  
ずと言った様子だ。時折、うわごとで「祐巳……、祐  
巳……」と呟いている。

「令さん、由乃さん。来てくれて、ありがとござい  
ます」

祐麒と祐巳の父の祐一郎が、令と由乃に声をかける。  
祐巳の母のみきは、祐一郎の肩にうなだれ、声が出せな  
い。祐麒が祐巳の家族の中では、一番しっかりしている  
ようにも見えるが、顔は青ざめ、手が僅かに震えている。  
「一体何! どうしたの? 何があつたの!?!」

祐麒に由乃が詰め寄る。

「僕もよく分からないんですが、酔っぱらいのトラック  
が突っ込んだらしいんです……」

祐麒が、拳に力を込める。無理もない。実の姉が理不  
尽な事故の犠牲者となったのだから。

「由乃さん……」

志摩子がゆっくりと立ち上がる。用事と言っても、同  
じ敷地にある小寓寺。留守電を聞く機会は由乃よりも早  
かったので、早めに病院に来る事ができた。しかし、存  
在を気づかせない程ショックを受けていた。

「志摩子さん、大丈夫?」

志摩子は一人では立てないらしく、乃梨子に付き添われている。小寓寺でも当然葬式は取り扱う。事故死も少くない。つい重ねてしまうのだろう。

「祐巳さん、どうなるのかしら？ もしこのまま……」

「縁起でもないこと言わないでよ!!」

「でも、私、私……」

由乃も泣きたい気持ちは分かる。

「手術くらい、私も受けたことあるけど、ちゃんと生きてるわよ!」

「でも由乃、心臓の手術と事故は違う……」

「令ちゃんは黙ってて!!」

こんな病院でまでコントをしなくても……。しかし、計らずもその場を和ませる。

その場に、さらに一人の少女が現れる。縦ロールを激しく揺らしながら。瞳子は、清子小母さまから連絡を受けて、この病院を知って来た。しかし、瞳子が来たことよりも、皆は手術中の赤ランプが消えたことに注視する。手術室の扉が開く。

「祐巳!!」

「祐巳さん!!」

「祐巳ちゃん!!」

手術室から出てくる搬送用ベッドに皆がすがりつく。

「祐巳! 祐巳!!」

祥子は、ベッドにすがり付いて悲痛な叫びを上げる。涙で顔はボロボロ。でも、誰もそれを気にする者はいない。

運ばれて行く祐巳と、ボロボロの祥子さまの様子を見て、瞳子は動くことができなかった。溢れた涙を拭うこともできなかった。口を押えた手の、左手の薬指に、祥子に買ってもらった指輪が光っていた……

## 第2章 再会

### 2・1

「ごきげんよう、紅薔薇さま」

「ごきげんよう」

桜の花びらが舞う中、紅薔薇さまと呼ばれて私は返事をする。しかし、私は今も悩む。本当に私が紅薔薇と名乗って良いかを。確かに私は先代の紅薔薇さまからロザリオを受け継いだ。生徒会役員選挙で信任されもした。自分でも紅薔薇と名乗っている。でも、私は大事なことを精算していない。それが終わらないと、真の紅薔薇では無い気がする。

「ごきげんよう、紅薔薇さま。何を暗い顔してるの?」

おかつぱ頭の少女が私に声をかける。

「あら、白薔薇さま、ごきげんよう」

「私、そんなに浮かない顔してまして?」

「してるわ。あなた、『紅薔薇さま』と呼ばれる度に暗

い顔になるのよ」

「そうです?」

自分でも心当たりがあるので、強く反論できない。

「紅薔薇さま」と名乗る決意をしたんだから、もっと毅然としなさい」

「そうね、そうするわ」

そう、いつまでも過去に捕われてはいけない。未来を向かなくては。もう、あの過去へは戻れないのだから。こんな、今の私を見たら、あの人も喜ばないだろう。いつかあの人が戻って来ても、恥ずかしくない生き方をしなくては。それが、私の、あの人に対する義務。あの人を、あんな目に遭わせてしまった私の義務、罪の償い。あの人への代わりに紅薔薇を名乗っている私の義務。いつかあの人に、紅薔薇の名前を返すまで、紅薔薇の名前に泥を塗るわけにはいかない。決意を新たに、マリア様を見上げる。左右の縦ロールが揺れる。

### 2・2

トルルルル……

『はい、小笠原でございます』



使用人だろうか？ 婦人の声がする。

「私、花寺学院大学一年、福沢祐麒と申します。祥子さんはご在宅でしょうか？」

『お嬢様ですか？』

電話の相手が不審がる。若い男からの電話だと警戒して当然だろう。

「祥子さんの…、妹の、祐巳の兄です」

「少々お待ち下さい」

祥子さんや清子さん相手だと祐麒でも通じるのだが、使用人相手だと説明しなければならぬ。一部の使用人だと通じるのだが、全員が全員、主の家族の交友関係に通じているわけではない。

『今、お繋ぎいたします』

切り替えの時間の後、祥子さんが電話口に出る。

『もしもし、祐麒さん？ ごきげんよう』

「今晩は、祥子さん。お久しぶりです」

『お久しぶり、もう随分と会っていないわね』

「ええ、祥子さんもお忙しい事と思います。姉の見舞いに来られないくらいに」

『そ、それは……』

電話の向こうで、酷く狼狽している様分かる。何を今更狼狽えるのだろうか？ 祐巳から離れたのは自分な

のに、それとも、良心の呵責があるのか。

「用件を言います。明日、病院に見舞いに来てくれませんか？」

『病院に……』

躊躇の音が聞こえる。そりゃ、今更見舞いには来づらだろう。

「姉が、祐巳が呼んでいます」

『祐巳が……？』

不審の声に変わる。

「祐巳が、目を覚ましました」

『本当!? それは本当なの!?』

歓喜と興奮の声に変わる。

「本当です。先月、目を覚ましました」

『先月!? どうして直ぐに言ってくれなかったの!?』

非難も混じる。

「色々事情がありますので、お伝えするのは控えておきました」

『事情? そんな、水臭い。ああ、もう、明日と言わず今から行くわ!!』

「いえ、明日にしてください。面会時間も過ぎてますので。それと、病院に着いても、直ぐ祐巳の病室に向かわずに、まず私を通してください」

『……どういうこと？』

「でないよ、また大変なことになります。そして、まだ誰にも言わないようお願いします。それでは、くれぐれもよろしくお願いします」

『どういうこと!? 説明してー!』

「それでは」

『ちよつと、祐麒さん!? 祐麒さん……!?』

遠ざけた電話口から、祥子さんの抗議の音が聞こえるが、無視する。明日になれば、事情は分かるのだから。

## 2・3

祥子は、祐巳の待っている病院へ急ぐ。昨晚は全く眠れなかった。しかし、祐巳に会えることを思うと、全く眠くない。祐巳が目覚めたことを、祐麒さんが祥子に伝えなかつた訳も考えた。やはり、あのことを両親から聞いているのだろうか？

病院の面接時間の開始よりも、大分早く着いた。が、玄関には既に祐麒さんが待っていた。勘の良い彼のことだ。祥子が早く着くことを見越していたのだろう。

「ごきげんよう、祐麒さん……」

挨拶をかけようとして、彼の奇妙な出で立ちに気づく。

花寺学院高等部の制服を着ている。彼はもう大学生になっていたのではなかつたらうか？

「こんにちは、祥子さん。よく来てくれました」

その声は、どことなく冷たい。

「祐麒さん、その服は？」

「訳は、先生から話してもらいましょう」

そう言つて、主治医の香月先生の部屋へ向かつた。

香月先生の部屋を訪れる。彼女もリリアン女学園出身。在学中に猛勉強して、医学部に進んだ秀才だ。リリアン女学園から医学部に行く人間など十数年に一度しか現れない。

「まず、話しておかなければならないのは、彼女の『時計』が止まったまま』と言つことよ」

『時計が止まった』……?』

「そう。彼女は、祐巳さん一年半前のままなの。あの事故があつた日から、彼女の時間はとまったままなの」

「あの、それはどういうことでしょうか? 記憶喪失……とは違うんですか?」

事故にあつた者が記憶喪失、ドラマなどではよくある展開だ。

「全然違うわ。それは記憶が無くなるもの。祐巳さんの

場合、記憶はあるの。ただ、その記憶が一年半前まで止まっているの」

「それは、もしかして……」

「そう、彼女は未だ高校二年生のままなのよ」

祥子の顔から血の気が引く。理解した。祐麒さんが花寺院高等部の制服を着ている理由も。

「祐巳さんは、事故に遭った後、せいせい数日しか眠っていないと思っているの。いえ、記憶に大分混乱をきたしているから、そういう時間概念まで理解しているかも怪しいわ」

なんと言うことだろう。祥子は声を上げることができなかった。

「だから、祐巳さんにとっては祐麒君も高校二年生のま  
ま。あなたも高校三年生。分かるわよね？ 紅薔薇さま？」  
紅薔薇さま、そう呼ばれるのは何年ぶりだろうか？

## 2・4

香月先生と、祐麒さんに連れられて、祐巳の病室へ向かう。ここへ訪れるのは何ヶ月ぶりだろうか。あのことがあって以来、足が遠のいた。

祐麒さんが、病室のドアを開ける。窓の側にいた祐巳

のご両親が、祥子の顔を見て驚く。そして、やはり気ま  
ずいのか、目を反らす。祥子は、ゆっくりと病室に入り、  
祐巳のベッドを見て、息を詰まらせた。

大分髪が伸びて、背中までできているのが目に留まる。  
祥子と同じくらいだろうか？ 身体は全体的に痩せこけ、  
以前のふくよかな抱き心地はありそうもない。顔も、タ  
ヌキ顔の面影はなく、ほお骨が出て、タヌキと言うより  
はキツネ顔だ。

その変わり果てた姿を見て、涙がこみ上げてきた。祐  
巳の姿が滲んでくる。その時、祐巳が顔を上げ、祥子の  
姿に気づいた。

「お姉さま!!」

懐かしい祐巳の声、その声は変わっていない。二歩程  
進んだ所で、「祐巳!!」と叫び、一気に駆け寄って祐巳  
に抱きつく。溢れる涙が止まらない。

「お姉さま、お見舞いに来て下さったんですね……。あ  
りがとうございます」

「何を言うの？ 祐巳、当たり前じゃない」

「そんな、私の我がままと不注意で事故に遭ったのに……」  
「そんな、祐巳はなにも悪くないわ！ 私が待ち合わせ  
場所に遅れさえしなければ、こんなことにはならなかつ  
たのよ!!」

「でも！」

「もう、これ以上言わないで！ 私は、祐巳が助かっただけで十分なんだから!!」

「はい……」

祥子と祐巳は、お互い抱きしめ合いながら泣き続けた。みき小母さまが、祐一郎小父さまにすがって泣く。小さく「ごめんなさい……」と声を振り絞っていた。祐一郎小父さまも、みき小母さまの肩を抱いてうなだれている。

「あ、お姉さま、ごめんなさい」

「なに？ もう謝らなくていいって、言ったでしょ」

身体を上げ、祐巳の顔を見つめる。やはり痛々しい。

「違うんです、その事じゃなくて、あの、私、ロザリオを……」

「ロザリオ……？」

祥子の顔が曇る。もしか……!?

「ロザリオをなくしてしまっただんです……。事故の時に……。祐麒にも探してもらったんですけど、見つからなかったって……」

祥子の顔から血の気が退く。

「そんな、気にしなくても良いのよ。ロザリオなんて無かったって、私たちが姉妹であることには変りないわ」

「お姉さま！」

今度は、祐巳が祥子に抱きつく。この感動的なやり取りを、冷淡に見つめる祐麒がいた。

## あとがき

皆さんごきげんよう。PARALLEL ACT 主催者 TomOne です。さて、今回の本はいかがだったでしょうか？ 本当は全4章の予定なんですけど、間に合わなかったので2章までです。つか、第4章の展開完全に考えてないし（笑）

元々、04年4月7日、「レイニーブルー」を読んだ直後、ふっと『君が望む永遠』と『マリア様がみてる』が一緒になったらどうなるか？ と言つのを思いついたのが始まりです。配役が予想以上に合っているぞ、と構想を練り始めました。

そんな時、久野さんが「f.rec animation」で、『それでその40本なりのストーリーや登場キャラが全部頭に入っているのだろうか：頭の中で複数のが融合したりとか』と投稿し、笠原さんが『ただ、2次創作な活動をされる方々にとって「頭の中で複数のが融合したり」というの

は、創作活動におけるスパイスみたいな役割を果たすこともあるかと思うので、それほど問題があるとは思えません。』とフォローを付けました。

ならば、と言うことで少し暖めていた『マリア様が望む永遠』の粗筋を投稿しました。それが結構受けたので、もつと練って本にすることを決意しました。なお、「キツネ顔」は渋谷さんのフォローから貰いました。

これがこの本を発行することになった経緯いきさつです。元が「レイニーブルー」を読んだ直後に浮かんだため、事故は9月よりも、6月ぐらいに起こった方がすっきりしたかも知れません。可南子出ないし。しかし、第3章の展開を考えると、9月に持つてこざるを得ませんでした。

さて、今回の本は、縦書きです。「電脳天使」なんかは、妄想本も横書きで出しましたが、『マリみて』の妄想本は縦書きだろうと。でも、EFTX2で縦書きは辛いですね。美文書にアスキーに、藤田先生の本まで動員してようやく今のようになつてます。いや、藤田先生の本は良いですね。と言うか、藤田先生の本がなければできませんでした。

そして、今回の本は表紙と挿絵が付いています。最初は自分で挿絵描こうかと思ってたんですが、時間が無い

のと、何より画力が無いので(爆) 絵描きに依頼しました。その為に、まともな絵が付いています。

さて、今後の予定ですが、冬コミまでにはちゃんと全4章まで仕上げた、完全版を出そうと思ってます。前編・後編と2冊の本にするかも知れませんが、元が薄いし(笑) 加筆修正があるので、1冊の本にするでしょう。それでは、ちゃんと本を完成させることを期待して。皆さんごきげんよう。

'04年8月12日

誌名	マリア様が望む永遠
発行	PARALLEL ACT
発行者	村上 智一 (TomOne)
発効日	2004年8月15日 (第1版)
URI	<a href="http://kikyousakura.ne.jp/~tomone/">http://kikyousakura.ne.jp/~tomone/</a>
E-Mail	<a href="mailto:tomone@kikyousakura.ne.jp">tomone@kikyousakura.ne.jp</a>

